# 静岡県立磐田南高等学校演劇部　第７回定期公演上演台本

## Showa Stories

作　大庭久幸

### ０・１「赤いスイートピー」（昭和57年）

音楽。（「赤いスイートピー」松田聖子）
緞帳が上がる。
舞台上には何もない。
＊　＊　＊
この劇を演じることになる四人の俳優たちが登場している。
ジャージなどの劇の練習着を着ている。
皆、歌の歌詞を口ずさんでいる。

俳優たち　♪春色の汽車に乗って　海に連れて行ってよ
煙草の匂いのシャツに　そっと寄りそうから
何故知りあった日から　半年過ぎても
あなたって手も握らない
I will follow you あなたに
追いてゆきたい
I will follow you ちょっぴり
気が弱いけど
素敵な人だから
心の岸辺に咲いた赤いスイートピー

音楽が消える。
女Ａが観客に向かって語り出す。

女Ａ　松田聖子さんの「赤いスイートピー」でした。
女Ｂ　昭和57年の曲です。
男Ａ　なんか、いいなぁ～。
女Ａ　なにが？
男Ａ　いいよね？
男Ｂ　え？
女Ａ　まさか、こういう彼女が欲しいとか？
女Ｂ　恥ずかしがり屋の自分にも、しっかりついて来てくれるような、彼女？
男Ｂ　あ、いいですね、そういうの。
女Ｂ　今どき、無理無理、そんな彼女は。
男Ｂ　え、そうなんですか？
女Ａ　男の、勝手な幻想。
男Ｂ　え、そうなんだ。令和の男には、夢も希望もないんだ？
女Ａ・Ｂ　ないない、全くない。
男Ｂ　え、ひどいな～。ね、それって、ひどいよね？

男A　ひどくない。
男B　え？
男A　僕は恋とか愛とか、関係ないんで。
女A　え、マジで？
男A　勉強の方が大事なんで。
女B　あのさ、そういうこと言うと、世間一般の人は本気にするから。
女A　この学校の生徒は、何より勉強優先なんだって。
女B　そういうイメージが、定着しちゃうから。
女A　て言うか、もともと定着してるところに、更に輪を掛けることになるから。
男B　じゃあ、なにがいいの？
男A　曲がさ、シンプルでストレートじゃん。
男B　え、そうかな？
男A　昭和の音楽が、今、見直されてる。
女A　あ、それ、聞いたことある。
女B　特に、若い世代に。
男B　え、そうなんだ？
女A　て言うことで、今回は昭和歌謡ミュージカルみたいな？
女B　オムニバス形式でお送りします。
男B　オムニバス？
女A　三つのショートストーリーをお楽しみください。
女B　昭和の音楽をモチーフにした、短編劇になっています。
男A　それぞれの劇はストーリーとして独立しているので、勘違いなさらないように。
男B　なんか、説明的だなぁ。
男A　だって、ちゃんと説明しておかないと。
女A　では、磐南演劇部がお届けする、昭和歌謡ミュージカル。
四人　開演です！

音楽（「木綿のハンカチーフ」）が聞こえてくる。
次第に暗くなる。

## 1「木綿のハンカチーフ」（昭和50年）

《登場人物》
女1　エンドウ　ユミコ　　男1の高校時代の同級生（二十歳）
男1　オオタニ　キョウヘイ　　大学生（二十歳）
女2　ナガシマ　サキ　　大学生（二十歳）

＊　＊　＊

客電が薄暗く点灯する。
女1が大きなリュックを背負って登場する。
アニメのキャラクターが大きくプリントされたトレーナーにGパン姿。
手にはスマホを持っている。
女1は客席の間を巡る。
スマホの画面を見ながら、何かを探しているようだ。
舞台上には、男1が登場していた。

男1はスマホを見ている。

＊　＊　＊

音楽が消えて、代わりに街の喧騒が聞こえてくる。
大都会の土曜日の午後。
客電が消えて、女1は舞台上に上がる。

女1　キョウちゃん！
男1　…。
女1　キョウちゃん！
男1　…。

男1はイヤホンで音楽を聴いているのだ。

女1　…？

女1は、男1に近寄る。

女1　キョ、ウ、ちゃ、んっ！

男1は無反応。
女1は、男1の両耳から、イヤホンをはずす。

男1　！
女1　キョウちゃん。
男1　…ユミコ？
女1　久し振り！
男1　おまえ、どうして…。
女1　ほんと、写真のまんまだら、ここ。
男1　え？
女1　キョウちゃんが送ってくれたじゃん、この写真。（と、スマホの画面を見せる）
男1　おまえ、仕事は？
女1　だって、今日は土曜日じゃん。
男1　ああ、そうか。
女1　今朝、磐田出ただよ、新幹線で。
男1　…。
女1　アパート行ったけど、いなかったもんで。ここに来れば、キョウちゃん、いるかもしれんって思って。
男1　おまえ、なにしに来たの？
女1　ここんとこ、ＬＩＮＥも既読つかんし。
男1　ああ、ごめん。
女1　心配だもんで、会いに来ただよっ！

女1は、男1に抱きつこうとする。

男1　…バカっ！

男1は、女1をかわす。
女1は、ヨロヨロと、リュックの重みで転倒する。
街の喧騒の音は消えていた。

女1　ハハ、照れてるら？（うつ伏せで倒れたまま）
男1　おい、大丈夫か？
女1　…起こしてや。
男1　え？
女1　起きれんし。（亀のようにジタバタしている）
男1　何してんだよ…。

男1、女1を起こす。

女1　ありがと。やっぱり、キョウちゃん、優しいら。
男1　そんなの送ったか、俺？
女1　へ？
男1　そんな写真。
女1　ほら、最初に送ってくれたじゃん。東京の、一番賑やかなとこだって。二年前だけど。
男1　そうだったかな？
女1　あたしも送ったよ、今年の桜の写真、ＬＩＮＥで。高校の校庭の桜の写真。でも、既読つかんかったし…。
男1　ごめん…。
女1　そんなに変わってないら？
男1　…そうかな？
女1　もっと、変わってるのかなって、思ってた。
男1　ユミコ、俺さぁ…。

女1は、スマホの画像と周囲を見比べている。

女1　東京って、どんどん変わってるって、よく聞くし…。
男1　ああ、東京のことか？
女1　え？
男1　変わる、変わらないって…。
女1　そうだよ。
男1　なんか、俺のことなのかなって…。
女1　ヤダっ！キョウちゃんは、高校の時から、変わらんって。
男1　…。
女1　陸上部の、短距離走のエースで、あたしらのスーパースターだったじゃん。
男1　…。
女1　ねえ、大学でもやっぱりスーパースター？記録更新してる？
男1　…。
女1　でさ、今も、ほんと格好いいっ！

女1、男1に再び抱きつこうと駆け寄るが、かわされる。

女1は、再びヨロヨロと、リュックの重みで転倒する。

男1　おまえな…。
女1　…起こしてや。（右手を差し出す）
男1　起きれるだろ。
女1　起きれない！（ジタバタしている）
男1　自分で起きろ。
女1　起きれないっ！（ジタバタしている）
男1　ほら、みんな見てるぞ。
女1　キョウちゃん、起こしてっ！（両手を差し出す）

男1、周囲の目が気になって、渋々起こす。

男1　ほんと、おまえも、変わらないな。（起こしながら）
女1　ありがと。
男1　強引に、周りを自分のペースに巻き込んでく…。
女1　そんなこと、ないら…。
男1　さっき、俺のイヤホンはずしただろ？最初に会ったときも、そうだった。
女1　え？覚えてないし…。
男1　俺が教室で音楽聴いてたら、急に、イヤホンはずしてさ…。
女1　そうだった？
男1　なんか、あのときのことが、甦（よみがえ）ってきてさ、ちょっと、懐かしかった。
女1　高校一年生のとき？
男1　うん。入学して、すぐだった。…てことは、五年前？
女1　もう、そんなになるかね？
男1　俺ってさ、けっこう人見知りだから、教室の中で、ずっと一人だったんだよな。で、五年前のちょうど今頃か、ユミコが声掛けてきたのは。

女1は、リュックを降ろして、中から紙包みを取り出していた。

男1　なにしてるの？
女1　二回も転んだし、お土産、大丈夫かなって…。
男1　こんな所で、出すなよ。
女1　あっ、「うなぎパイ」、砕けてるしっ！

女2が登場する。
両手にスタバのカップを持っている。

女2　ごめん、キョウヘイ。待った？
男1　あ、まあ、ちょっと…。
女2　…誰？
女1　…。
女2　知り合い？
男1　ほら、高校の時の…。
女1　あ、ユミコです。

女2　え！？
女1　キョウちゃんと、高校の同級生のユミコです。あ、ちなみに、陸上部のマネージャーしてました。
男1　あ、こっちは、大学の同級生の…。
女2　サキです。
女1　サキさん？
男1　うちの陸上部の、マネージャー。
女1　あ、そうなんだ…。
女2　え、磐田からわざわざ？
女1　あ、ちょっと心配だったもんで。二年も会ってないし。
女2　…ちょっと。
男1　え？
女2　ちょっと、こっち来て…。

女2は、男1を連れて、女1から少し離れる。

女2　とりあえず、これ。

女2は、男1にカップの一つを渡す。

男1　ありがと…。
女2　キャラメルマキアートでよかったよね？
男1　うん。
女2　どういうこと？
男1　俺も知らなかったんだよ、今日出て来るなんて。
女2　キョウヘイが、呼んだんじゃないんだ？
男1　違うって！
女2　で、どうするの？
男1　どうするって？
女2　彼女のこと。
男1　ユミコ？
女2　うん。
男1　…どうしよう？
女2　わたしに聞かないでよ。

女1が、二人の近くに歩み寄っていた。

女1　…あの。
男1　え？
女1　今日は、二人でデートですか？
男1　おまえ、なに言ってるんだよ。
女1　あ、なんか、そうなのかなって…。
女2　あの、ユミコさん…。
女1　あ、いいんです。あたしも、急に出て来ちゃったから…。
男1　あのさ、そうじゃなくて…。

女1　そうじゃなくて？
男1　デートとか、そういうのじゃなくて…。
女1　あの、これ砕けちゃったけど、一応、お土産なんで。
男1　…。

男1が受け取ろうとしないので、女2に差し出す。

女1　ハハ、バラバラになっちゃって、ごめんなさい。
女2　…。

女2は、「うなぎパイ」の箱を受け取る。

女1　じゃ、あたし帰るから。
男1　ユミコ…。
女1　キョウちゃんが、元気だってことが分かれば、それで十分だし。

女1は、急いでリュックを背負う。

女1　じゃ…。
女2　ちょっと待って。
女1　キョウちゃん、ＬＩＮＥ、見るだけでいいから。
男1　…。
女1　既読になれば、一応、元気でいるってことは分かるから。
男1　…。
女1　せめて、それだけは、お願い。

女1、走って退場する。

男1　…。
女2　いいの？
男1　え？
女2　これでいいの？
男1　だって、しょうがないよ。
女2　しょうがなくないっ！
男1　…なんだよ、大きな声出して。
女2　あの人でしょ？
男1　え？
女2　殻（から）に閉じこもりがちなときに、いつも、引っぱり出してくれたのは。
男1　…。
女2　キョウヘイ、そう言ってたじゃん。
男1　…そうだけど。
女2　記録が伸びないって、悩んで、ほとんど引きこもってさ。スマホも触（さわ）れないほど、落ち込んでさ。で、久し振りに、こうやって、強引に外に連れ出したけど、それも、半年かかった。
男1　ごめん。

女2　無理矢理、シャワー浴びさせて、髪も髭（ひげ）も伸び放題だったから、なんとか連れ出して、美容院に行って。
男1　ほんと、ありがとう。
女2　でも、わたしはキョウヘイの見かけは整えてあげられても、心の底に光は当てられないから…。
男1　え？
女2　わたしには、ここまでが限界だから、悔しいけど…。
男1　サキ…。
女2　いつも言ってたじゃん、ユミコさんのこと。
男1　…。
女2　ほら、追っかけなよ。
男1　え？
女2　連れ戻して来なよ。で、弱音、吐き出しちゃいなよ。ガンガン吐き出せば、スッキリするって。また、ユミコさんが、キョウヘイを元気にしてくれるって。
男1　サキ…。
女2　今なら、追いつくよ。あっちは大きな荷物背負ってるし、キョウヘイは陸上部のエースなんだから。
男1　でも…。
女2　ほら、行きなよ！
男1　…。
女2　はい、カップ。

女2は、「うなぎパイ」の箱を脇に挟（はさ）み、左手を差し出す。

男1　え？
女2　カップは、わたしが持ってるから。
男1　サキ、ありがと！

男1は、カップを女2に手渡して走って退場する。

女2　…。

女2は、男1の後ろ姿を見送っている。

女2　わたし、なにしてんだろ？

女2、カップのコーヒーを飲む。

女2　なんか、妙に苦いな、今日のエスプレッソ…。

音楽。（「木綿のハンカチーフ」）
ゆっくり暗くなる。
しばらくして、音楽が消えていく。

## 2「六本木心中」（昭和59年）

《登場人物》

女1　サトウ　マリ　小学五年生（十一歳）
男1　オダ　カケル　小学五年生（十一歳）
女2　サトウ　テルヨ　女1の母親（四十歳）
男2　オダ　トシオ　男1の父親（四十五歳）

＊　＊　＊

音楽。（「六本木心中」アン・ルイス）

＊　＊　＊

初秋の日曜日の午後。
街外れの遊園地。

〈第1景〉

照明が入る。
女1と男1が疾走している。
（実際に舞台上を駆け回ることはしないで、客席に向かって駆け足の演技）
男1は眼鏡をかけている。
音楽が消える。

男1　ちょっと、たんま、たんま。
女1　なに？
男1　ダメ、死にそう。

男1は地面に大の字になって寝転ぶ。

女1　だらしないな〜。
男1　だって、走るの苦手だし…。
女1　て言うか、運動不足なんだよ！
男1　もう、聞き飽きた。「運動しろ」って。
女1　は？あたし、今、初めて言ったんだけど。
男1　うちのパパが、毎日一度は言うから。
女1　言われて当然。
男1　だって僕は、インドア派だから。
女1　男はね、太陽の下で身体動かすものなの。
男1　それって、偏見だなぁ〜。今の時代に合わないよ。

男1は起き上がる。

男1　ありや、眼鏡、曇って見えない。

確かに、男1の眼鏡は白く曇っている。

女1　もう、しっかりしてよ。

女1は、男1の眼鏡を外して、ハンカチで拭く。

男1　…ありがと。
女1　日頃から運動してれば、走れるようになるから。
男1　でも、無理だし。
女1　は？
男1　どうせ、僕は運動音痴だし。
女1　なに開き直ってんのよっ！
男1　だって…。
女1　あんたさ、さっきから「だって」とか「でも」とか「どうせ」が多くない？
男1　だって…。
女1　ほら、また。
男1　でも…。
女1　「だって」「でも」「どうせ」の三D（さんディー）が、人生をつまらなくする。
男1　どうせ、僕なんか…。
女1　ほら、また。
男1　はいはい、口（くち）チャックっと。（口のチャックを閉じる仕草）
女1　なんで、こんな奴、好きになったんだろ？
男1　それは、こっちの台詞。
女1　は？
男1　なんで、こんな子、好きになったんだろ？
女1　なんか、くすぐるのよね、この、なんて言うの？母性本能？
男1　コチョ、コチョ、コチョ…。（と女1をくすぐろうとする）
女1　やめてっ！

女1は、男1を突き飛ばす。
男1は転倒する。

男1　なんか、ゾクゾクするんだよね、君のその気の強さに。
女1　あんた、完全にM（エム）だね。
男1　違うよ、僕は2L（ツー エル）だよ。
女1　は？
男1　服のサイズは。
女1　つまんないこと、言ってないで、ほら、立ちなさいよ。
男1　うん。

男1は立ち上がる。

女1　…とにかく、この遊園地、まず出よう。
男1　で、どこに行くの？
女1　分かんない。
男1　え、決めてないの？
女1　あんたね、だいたい、こういうことは、男の方がリードするもんなのっ！
男1　だって…。

女1　ほら、また。
男1　でも、急だったから…。
女1　もう、イライラするな～。
男1　君が、突然、僕の手を握って言ったんだから、「駆け落ちしよう」って。
女1　とにかく、行こう。
男1　うん。
女1　もう、走れる？
男1　たぶん。
女1　よし、行くよ。

女1は走って退場する。

男1　ちょっと、待ってよ！

男1も走って退場する。

〈第2景〉

女2が登場する。
そのあとから、男2が登場する。

女2　で、お名前なんでしたっけ？
男2　オダです。オダ　トシオ。
女2　ごめんなさい。で、息子さんが、えっと…。
男2　カケルです。オダ　カケル。
女2　そうでした。そのオダ　カケルくんを、わたしの娘が？
男2　そうです。えっと、サトウ…。
女2　サトウ　マリです、娘は。で、わたしは、サトウ　テルヨ。
男2　そうでした。すみません。ちょっと慌ててるんで、こんがらがっちゃって…。
女2　もう一回、整理しますね。えっと、あなた、オダ　トシオさんの息子さんの、オダ　カケルくんを、わたしの娘が、連れ去ったと？
男2　はい。
女2　うちのマリが、そんなことするかな？
男2　だって、わたしは、ちゃんと見たんだから…。
女2　なにをですか？
男2　うちの息子と、同い年ぐらいの女の子が、うちの子の手を引っ張って走っていくのを。
女2　逆じゃないんですか？
男2　逆？
女2　うちのマリを、あなたの息子さんが、連れ去ったんじゃ？
男2　だって、ちゃんと見たんだから！
女2　ちょっと、落ち着いてください。
男2　すみません。
女2　ただ、二人とも迷子になっただけなんじゃ…。
男2　迷子じゃないよ。誘拐だよ。
女2　迷子の場内アナウンスを頼みに来たら、突然、言いがかりつけられて…。

男２　いや、わたしも、最初は「迷子」っていうことで、呼び出しアナウンスを頼みに来たんです。そしたら、あなたが、「うちの娘が迷子だ」って言うの聞いて、ピンと来たんです。
女２　ピン？
男２　いや、これは「迷子」じゃないぞ、「誘拐」だぞって。
女２　だって、うちのマリは、小学校五年生ですよ？
男２　うちのカケルも、小学校五年生です。
女２　小学校五年生は、「誘拐」なんかしないでしょ？
男２　小学校五年生は、「迷子」にもなりません。もうそんなに子どもでもないし…。
女２　まあ確かに、うちのマリは、ちょっとませたところはありますけど…。
男２　うちのカケルは、大人しくて、ちょっと気が弱いところがあるんです。そんなカケルを、あなたの娘さんが、脅（おど）したんだ！
女２　まあ確かに、うちのマリは、ちょっと気が強いところもありますけど…。
男２　ほら、やっぱり…。
女２　でも、小学校では世話好きの、しっかり者で通ってるんですよ、うちのマリは。
男２　てことは、大人しくて、気の弱いうちのカケルを、しっかり者で、世話好きのマリさんが、お世話してくれてると言うんですか？
女２　あ、そうそう。そういうことですよ、きっと。
男２　あの、どんなお世話をしてるんですか、うちのカケルの？
女２　それは…。
男２　それは？
女２　分かりません。
男２　警察に行きましょう。場内アナウンスより、警察です。
女２　こっちこそ、変な言いがかりつけられて、警察呼びたい気分ですから。
男２　言いがかりって、それも言いがかりだなぁ。

女２が退場しようとする。

男２　あ、ちょっとどこ行くんですか？
女２　こんなことしてるより、探した方がいいんで。

女２は退場する。

男２　え、ちょっと待ってください。

男２は、女２のあとを追って退場する。

〈第３景〉

女１と男１が、走って登場する。

女１　あれ、出口どっちだっけ？
男１　え、知らないの？
女１　よく覚えてないし。
男１　しっかりしてよ！

女1　あれ、そう言えばさ、まだ名前、知らなかった。
男1　…そうか。
女1　なんか、走るのに夢中で、名前聞くの忘れてた。
男1　恋する二人には、名前なんか関係ないって？
女1　は？
男1　なんか、「ロミオとジュリエット」みたいだね。
女1　なに言ってるの？
男1　「名前にどんな意味があるというの？バラという花にどんな名前をつけようとも、その香りに変わりはないはずよ」ってね。
女1　は？
男1　だから、君がたとえどんな名前であったとしても、君の魅力は変わらないってこと。
女1　わけ分かんない。
男1　僕、運動は苦手だけど、本読むのは好きだから。
女1　で、名前、知りたくないの？
男1　知りたい、知りたい。
女1　マリ。サトウ　マリ。
男1　普通だな～。
女1　いいじゃん、普通で。
男1　僕は、オダ　カケルです。
女1　あんたも、微妙じゃん。
男1　フフフ…。
女1　なに笑ってるのよ？
男1　へへへ…。
女1　気持ち悪い笑い方、やめて。
男1　改めて見ると、結構、かわいいなって。
女1　え？
男1　マリちゃん。
女1　なに、言ってるのよ。
男1　僕さ、女の子と二人っきりでいるのって、経験ないし。
女1　あたしだって、ないよ。
男1　ええっ！
女1　そんなに、驚かないでよ。
男1　結構、うぶなんだ…。
女1　…。
男1　そんなところが、また、かわいいっ！
女1　ほんとに、なんで、こんな奴、好きになったんだろ？
男1　僕はさ、手を握られたときに、ビビッてきたから。
女1　は？
男1　この子に、ついて行こうって。
女1　なに、それ。
男1　だって、本当のことだから。
女1　なんか、あたしも、ビビッてきてさ、あんた見てたら。
男1　え、ほんと？
女1　ベンチにボーッと座ってただけなんだけど、なんか、ビビッてきてさ。
男1　パパが、トイレ行ってたから、待ってただけなんだけどね。

女1　で、気がついたら、あんたの手を握ってた。
男1　「恋は理屈じゃない」ってね。
女1　結婚しよ。
男1　え？
女1　もう、結婚するしかないよ、こうなったら。
男1　て、僕たち、まだ小学生だよ。
女1　結婚も理屈じゃない。
男1　いやいや、結婚は理屈だから。生活があるから。
女1　なに現実的なこと、言ってるのよ。
男1　それにさ、結婚したら、君、名字（みょうじ）変わるよ。
女1　そんなこと、かまわないって。それこそ、名前なんか、関係ないし、愛があるなら。
男1　でもでも、マリなんだよね、名前？
女1　そうだよ。
男1　僕、オダだから。オダ　カケル。
女1　なにが言いたいの？
男1　だから、結婚したら、「オダ　マリ」になるよ。
女1　え？
男1　「オダ　マリ」。「お黙り」ってね。
女1　「お黙り」？
男1　まあ、君らしくていいけど…。
女1　あ、それ、ちょっと微妙かも…。

〈第4景〉

女2が、走って登場する。

女2　マリ！
女1　お母さん！
男1　え？
女1　ヤバい。逃げよう。

女1は、女2のいる反対方向に走り出そうとする。

男2　カケル！
男1　パパ！

女1と男1が退場しようとした方から、男2が登場する。

男2　やっと、見つけたぞ。
男1　ねえ、どうしよう？
女1　どうしようって、あんた男でしょっ！
男1　男か女かなんて、この際、関係ないよ。
女1　言ってやってよ、「僕たちは結婚するんだ」って！
女2・男2　え～っ！？
女1　で、この子は「オダ　マリ」になるんだって！

女2・男2　は？
女2　「お黙り」になる？
男2　言ってる意味が分からない…。
女2　わたしたちに、「お黙り」って言ってるんじゃないですか？
男2　え、そういうことなのか？
女1　じゃなくて、お母さん、ごめんなさい、あたし、この子と結婚するの。
女2　なにを言ってるの、マリ？
男2　カケル、そういうことなのか？
男1　うん。
男2　ちょっと、待てよ！
男1　ごめんね、パパ。
男2　小学五年生が、結婚できるわけないだろ！
男1　今はダメでも、できるようになったらするから。
男2　なにバカなこと、言ってるんだ！
女2　あの、ちょっと、いいですか？
男2　え？

女2は、男2に近づく。

女2　マリ、逃げないでね。今、こちらと相談するから。
女1　相談？
男1　え、許してくれるの？
女2　だから、ちょっと相談するから、ちょっと待ってて。

女1と男1は、警戒している。

女2　…わたしに、いい考えがあります。
男2　なんですか？
女2　結婚しましょう。
男2　…は？
女2　て言うか、結婚してください。
男2　あなた、なに言ってるんですか？
女2　どうせ、あなたバツイチかなんかでしょ？
男2　え？
女2　日曜日の遊園地に、父親と息子の二人連れって、それしかないだろうって。
男2　まあ、そうですけど…。
女2　わたしも、そうです。
男2　…。
女2　で、初めて見たとき、ビビッてきました。なんか、この人いいなって。
男2　でも、なんか急過ぎて…。
女2　わたしじゃ、ダメですか？
男2　て言われても、あなたのこと、よく知らないし…。
女2　そんなこと、あとからだんだん知ればいいんです。だから、結婚しましょう。そうすれば、あの子たちは、結婚できなくなる。
男2　え？

女2　だって、兄弟になるんだから。
男2　あ、そうか！
女2　まあ、一緒に暮らすことにはなるけど、結婚はできない。
男2　無理矢理、別れさせるわけでもなく…。
女2　でも、結婚はできない。
男2　それって、いい考えだと思います！
女2　でしょ？
男2　実は、わたしも、あなたのこと、ちょっといいなって思ってたんです…。
女2　て、いうことだから！
女1　え？
女2　聞こえてたでしょ？
女1・男1　…。
女2　というわけで、お母さんと、こちらの…。
男2　オダです、オダ　トシオ。
女2　オダ　トシオさんは、結婚するから。
男2　で、おまえたちは、兄弟になる。
女2　まあ、結婚はできないけど、一緒に暮らせるようにはなるから。
男2　いい考えだろ？

女2・男2は退場し始める。

女2　で、ちょっと細かいことなんですけど、わたし、あなたの名字（みょうじ）になるのは、ちょっと微妙なんで、婿に入ってもらってもいいですか？
男2　え？
女2　わたし、サトウ　テルヨなんで、「オダ　テルヨ」、「おだてるよ」になっちゃうんで…。
男2　ハハハ、「おだてるよ」は微妙ですね。
女2　じゃあ、婿ってことで…。
男2　あ、でも待ってください。そうすると、わたしは、「サトウ　トシオ」になるんですよね？「さとうとしお」、「砂糖と塩」。
女2　まあ、そうなります。
男2　え、それって微妙じゃないですか？

女2・男2は去る。

女1　…どうしよう？
男1　え？
女1　あたしたち、兄弟になるから、結婚できないのかな？
男1　で・き・る・ん・で・すっ！
女1　え？
男1　義理の兄弟は、血がつながってないから、できるんですっ！
女1　なんだ、そうなの？
男1　まあ、あの二人には、黙っておこうよ。
女1　自分の親に向かって言うのもなんだけど、バカだなぁ～、お母さん。
男1　うちのパパも、バカだなぁ～。ちゃんと調べもしないで。

女1・男1は退場し始める。

女1　でね、やっぱり、あたし、「お黙り」はちょっと微妙なのよね。だから、こっちの名字（みょうじ）になってくれない？

男1　え、イヤだよ。君の名字（みょうじ）って、「佐藤」だよね？「サトウ　カケル」、「砂糖かける」になっちゃうよ。

女1　「お黙り」より、マシだって…。

女1は退場する。

男1　ヤダよ！「砂糖かける」なんて、ヤダからねっ！

音楽。（「六本木心中」）
男1は走って退場する。
しばらくして、音楽が消えていく。

## 3「時をかける少女」（昭和58年）

《登場人物》

女1　ワタナベ　シホ　　海を見る女（二十歳）
女2　サエキ　フミエ　　喫茶店の店員（二十九歳）
男1　ワタナベ　ツヨシ　　（？）

＊　＊　＊

音楽。（「時をかける少女」原田知世 ※アルバム『music & me』のバージョン）

＊　＊　＊

二〇二三年二月上旬の午前。
海の見える喫茶店。

〈第1景〉

音楽に波の音が混じり始める。
次第に音楽は消えて、波の音だけになる。
照明が入る。

＊　＊　＊

喫茶店の店内。テーブルが一つと、椅子が二脚ある。
女1が、椅子に腰掛けている。
テーブルの上には、コーヒーカップが二つある。

女1　…ここは、温かくていいね。二月なのに、こんなに陽が差し込んで。海もよく見える。

男1がゆっくり登場する。

女1　やっと、海が見られるようになった。あれから十一年だっていうのにね。

男1　長かったな。

女1　長かった。本当に長かった…。

波の音が消えていく。
男1は、女1の隣の席に腰掛ける。

女1　わたし、この頃考えるの。女の故郷（ふるさと）ってどこだろうって。まだ二十歳なのに。女の故郷（ふるさと）って、生まれたところ？嫁ぐところ？家族と住むところ？それとも、命を終えるところ？
男1　なんだよ、急に…。
女1　これから、わたし、どうなるんだろうって…。
男1　ごめん、苦労かけたからな。
女1　やっと気持ちに、なんとなく整理がついた気がするけど、なんか先が見えない感じがして…。
男1　そうか、そんなもんか…。
女1　あんな経験したから、だいたいのことは耐えられる気がするんだけど、でも、やっぱり、ダメだった。あのときだけは、ダメだった。
男1　苦労かけたな…。
女1　あんまり急だったから。

女2が登場する。

女2　あの…。
女1　はい？
女2　コーヒーのお代わりは、どうですか？
女1　あ、どうしようかな…。
男1　俺は、もらおうかな、せっかくだし。
女2　冷めちゃってませんか？
女1　どうかな？

女1は、コーヒーカップに口を付ける。

男1　もらっとけよ。冷めたコーヒーほど、つまらんものはないぞ、この世の中で。て、俺が言うのもなんだけど…。
女1　じゃ、もらおうかな？
女2　はい。
女1　あ、二つともね。
女2　…はい。

女2は、コーヒーカップを片付けて退場する。

男1　…あのな、今朝から、言おうかやめようか迷ってたんだけど、おまえ、ちょっと太ったんじゃないか？なんとなく、頬（ほほ）のあたりが、ふっくらした感じがする。いや、いいんだよ、俺はむしろその方がいいと思ってるから。なにより健康的だよ。立ち直った感じがする。うん、その方がいいよ。

女1が、唐突に両腕をいっぱいに伸ばして背伸びをする。

男1　！（驚く）
女1　ちょっと、眠くなってきた。
男1　なんだよ、びっくりするじゃないか。
女1　ちょっと、眠ろうかな…。
男1　ダメだよ、こんな所で寝ちゃあ。お店の人に、迷惑だろ。
女1　あんまり、温かくて、気持ちがいいし。
男1　だからって、こんな所で寝るなよ。おまえ、どこでも寝られていいな。俺はダメなんだよな。自分の家の布団の中でないと寝られない質（たち）で。

〈第2景〉

女2が、コーヒーカップを二つ持って登場する。

女2　…お待たせしました。
男1　ありがとう。

女2は、テーブルの上にコーヒーカップを置く。

女1　…ありがとう。

女2は、退場しようとするが、立ち止まる。

女2　あの…。
女1　はい？
女2　こんなこと聞いて、本当に失礼なのかもしれないんですけど…。
女1　なんですか？
女2　気を悪くしないでください。
女1　…。
女2　なんで、いつも二つなんですか？
女1　二つって？
女2　あ、だから、コーヒーです。

女1、テーブルの上のコーヒーカップに目をやる。

男1　ああ、やっぱりそう思うよな。そう思うのは、仕方ないよ…。
女2　あ、すみませんでした。やっぱり、失礼でしたよね、本当に、ごめんなさい。

女2は、深々と頭を下げて、退場しようとする。

女1　どうしてだと思います？
女2　え？

女2は立ち止まる。

女１　どうしてだと思います？
男１　おいおい、逆ギレか？おまえって、けっこう短気なところあるからな。いいじゃないか、許してやれよ。
女１　あ、別に、わたしは怒ってませんから。
女２　はい…。
女１　あなたが、なにを想像しているかは、だいたい分かりますから。
女２　…すみません。
男１　だから、そのぐらいで許してやれって。
女１　誰だと思います？
女２　え？
女１　誰の分だと思います。
男１　おい、やめとけって。
女２　…彼氏さんですか？

間。

女１　当たり。
男１　て、違うだろ。お父さんだろ。そんなところで、見栄はるなって。
女１　て言うのはウソで、はずれ。
女２　…。
女１　父です。お父さん。
女２　三ヶ月ぐらいになりますか？
女１　え？
女２　あ、ごめんなさい。別に、監視してたわけじゃないんですけど…。
女１　カンシ？
女２　あ、なんて言うんですか？見張ってたっていうか…。
女１　十一月からです。
女２　ああ、やっぱり…。
男１　そりゃ、気になるよ。三ヶ月間、毎週日曜日に来て、一人なのに、コーヒー二つ頼むんだから。
女１　父は、ここのコーヒーが好きで、よく日曜日に来たんです。ほんとに、よく来たんです。母との思い出の場所だったみたいで。母は、わたしがまだ幼い頃に病気で亡くなって、父に育てられたから、わたし。
女２　そうでしたか。わたし、ここで働き始めて、まだ半年なんで…。
女１　でも、あれ以来、とても来る気になれなくて。
女２　やっぱり、あれですか？
女１　え？
女２　え、だから…。（女2は、海が見える方角を指さす）
女１　…。
女２　今日は、あんなに穏やかだけど、あの日は…。
女１　はい…。
男１　俺も、急に居なくなっちゃったから、なんか実感がなかったみたいで、おまえも、気持ちに整理がつかなかったんだろうな。あいまいな喪失感っていうのかな？なくしたのか、なくしてないのか、はっきりしない感覚っていうのかな。なくしたんだけどね、確

かに。でも、それが実感できない。そういう感覚に、ついていけなかったんだろうな、おまえは。
女２　あ、ごめんなさい。立ち入ったこと聞いてしまって…。
女１　去年の秋にね、行ったんですよ、父が見つかったところに。
女２　…。
女１　父が見つかったのが、秋だったから。毎年、見つかった日に、そこに行くことにしてたんです。
男１　いつも、ありがとな。
女１　荒れた野原なんですけどね。ススキがいっぱいはえた。そこにうずくまって、しばらく泣くんです。そんなことが、何年も続いたんです。そして、ずっと続くと思ってたんです。
男１　…。
女１　で、去年の秋に見つけたんです、ススキの根元に、これを…。

女１は、ポケットから古びた腕時計を出して、テーブルの上に置く。

女２　腕時計？
女１　父のです。
女２　え？
女１　毎年、行ってたのに…。
女２　気がつかなかったんですね？
男１　だって、草ボウボウだからね。
女１　それ以来、なんか急に、心強くなったって言うか、この時計持ってると、心が落ち着く。
女２　…。
女１　で、海も見られるようになって、ここにも来られるようになった。父が、ここのコーヒー飲みたがってる気がして…。
男１　そりゃ、飲みたかったぞ。ここのコーヒー、うまいからな。
女２　…。
女１　だから、これからも、来ていいですか？

女２は、テーブルの上の腕時計を手にする。

〈第３景〉

女２　二時四十六分？
男１　あの時刻だ。
女１　そう、その時から、わたしの時間は止まっていた。でも、動き出したんです、それ見つけてから。

女２は、腕時計を手にしたまま、うずくまってしまう。

男１　あれ？
女１　え？

女2は泣いているようだ。

男1　おいおい、大丈夫か？

女1　大丈夫ですか？

女1は立ち上がり、男1が腰掛けている椅子をつかむ。

男1　なんだ、この椅子、使うのか？

男1は立ち上がる。

女1は、女2の近くに椅子を運ぶ。

女1　…座りますか？

女2は、顔を上げる。

女1に手を取られ、椅子に腰掛ける。

女2　ありがとうございます。ちょっと、思い出しちゃって…。

女1　あなたも？

女2　え？

女1　あなたも、誰か？

女2　…。

男1　よせよ、そっとしておいてやれよ。

女2　…父と、母と、妹です。

女1　…。

女2　ちょうど高校の卒業式のあとで。進学もダメになって、みんな居なくなって…。

女1　そうだったんですか。

女2　なにもかも、なくなって、ダメになって。それから、ずっと一人でした。

男1　気の毒にな…。

女2　いろんなアルバイトをして、で、半年前から、ここで働き始めて…。

女1　…。

女2　だから、いつもコーヒー二つ注文する、あなたのことが、とても気になって。この人なら、わたしの気持ち、分かってくれそうな気がして。だから、今日、思い切って話し掛けたんです。

女1　そうですか…。

女2　すみません、心配かけちゃって…。

女2は立ち上がろうとする。

女1　もう少し、座ってた方が…。

男1　なんか、俺、居づらくなってきたな…。

男1は退場しようとする。

女1　ここに居てください。

男１　え！？
女１　もう少し、休んだ方が…。
男１　ああ、なんだ、そっちのことか。びっくりするな。

女２は、腕時計を女１に返す。

女２　…こんなわたしですけど、今、付き合ってる人がいるんです。ここで、声掛けてくれて。三つ上なんですけど。この前、結婚しようって言ってくれて…。
男１　え、それは、よかったな。
女２　でも、わたし、どうしていいのか分からなくて…。
男１　え、なんで？
女１　好きなんですか、その人のこと？
女２　はい。
男１　じゃあ、結婚すればいいよ。迷うことない。
女１　でも、また失うのが怖い？
女２　…はい。
男１　え、そうなの？
女１　分かります、その気持ち。
男１　え、そうなのか？分からんもんだな、女の気持ちは…。
女２　喜びの裏側に、それを失ったときの恐ろしさが潜（ひそ）んでいるみたいで…。わたしの時計も、あの時からずっと止まってるんですね、きっと。で、動き出せないでいる。

間。

女１　結婚したらいいですよ。
女２　え？
女１　わたしも、高校卒業して二年なんです。進学もあきらめて、やっぱりアルバイトしてます。そして、これからどうなるんだろうって、不安ばかりの毎日だったんですけど、今、お話うかがって決心がつきました。そうですよね、やっぱり、生きてくしかないんですよね。
女２　…。
女１　前を向いて。
女２　…はい。
女１　ねえ、お父さん！（客席に向かって）
女２　え？
女１　あ、父のことです。
男１　俺か？
女１　ほら、呼び掛けてみて。
女２　はい。
女１　わたし、生きていくから！（客席に向かって）
女２　わたしも、生きていくから！（客席に向かって）
女１　ちゃんと、生きていくから！（客席に向かって）
女２　ほんとに、生きていくから！（客席に向かって）
女１　どう、届いてる気がするでしょ？
女２　届いてますね、きっと。

男１　うん、届いているよ。…ありがとう。

音楽。（「時をかける少女」）
立ってる女１は、腰掛けている女２の肩に手を置く。
女１と女２は、微笑み合う。
男１は、二人を温かい眼差（まなざ）しを投げかけている。
ゆっくり暗くなる。

## ０・２

音楽（「時をかける少女」）が消えていく。
＊　＊　＊
音楽が消えて、照明が入る。
この劇に登場していた四人の俳優たちが登場している。

女Ａ　…これで、劇は終わりです。（観客に向かって）
女Ｂ　三つのストーリーを、楽しんでいただけましたか？（観客に向かって）
女Ａ　皆さんが、わたしたちと一緒に、昭和歌謡の良さを感じていただければ、幸いです。
（観客に向かって）
男Ａ　なんだか、どの曲にもストーリー性を感じたね？
男Ｂ　ああ、そう言えば。
女Ｂ　で、そのストーリーは、わたしたちの日常にも有りそうなんだよね。
男Ｂ　ああ、確かに。
女Ａ　それが、昭和の歌の魅力なのかもしれない。
女Ｂ　で、最後の曲は？
男Ａ　やっぱり、「赤いスイートピー」だね。
男Ｂ　ほら、やっぱり、そういう彼女が欲しいからじゃん。
女Ｂ　恥ずかしがり屋の自分にも、しっかりついて来てくれるような？
男Ａ　違うよ！
男Ｂ　照れるなよ。
男Ａ　だから、違うって！
女Ａ　ほら、終わりにするよ。
女Ｂ　そうそう、そうだった。
男Ｂ　でないと、切りがないから。
男Ａ　ほんと、違うから。
男Ｂ　分かったから。
男Ａ　ほんとだから。
女Ｂ　しつこいなぁ～。
女Ａ　じゃあ、これからも磐南演劇部を、よろしくお願いします。
女Ｂ　それでは、これでお別れです。
女Ａ　では、次の上演まで！

音楽。（「赤いスイートピー」）
緞帳が下りる。

劇が終わり、わたしたちの日常が動き始める。

おわり

※台本作成の上で、次のものを参考にしました。
「二人セゾン」欅坂46　（作詞・秋元康／作曲・SoichiroK　Nozomu.S）
『戯曲　福島三部作』谷賢一（而立書房）
『ロミオとジュリエット』W・シェークスピア／中野好夫 訳（新潮文庫）
「精霊流し」岡部耕大（『精霊流し 岡部耕大戯曲集』（而立書房）所収）
東日本大震災に関する諸々の報道